

Oliver Twist

——闇の世界——

藤 本 隆 康

... scarcely knowing where he was, or what was passing around
him.¹⁾

これはオリヴァが二度目に盗賊たちにつかまった後、押し込み強盗に入る夜、途中でサイクスに連れ込まれた隠れ家でのオリヴァの状態である。暗闇の中、得体の知れない家で酒を酌交す得体の知れない男たち。何も分からないまま、オリヴァは闇とどす黒く濁った空気に怯える。さらに加えて、この隠れ家は外の濃密な霧と漆のような闇に包まれているのである。

こうした場面が象徴するように、*Oliver Twist* の作中人物たちは光の欠乏によって病み怯えている。物語の始めの方で、オリヴァが葬儀屋のサワベリィに連れられて最下層の人間が生活する醜悪な路地を訪れたとき、そこで死んだ女の夫が吐き出すように、“She died in the dark—in the dark!” と悲痛な声を発する。人間は、非情な闇から逃れるすべも知らず虫けら同然に死んでいくのである。この言葉の醸し出す暗いトーンは物語の背後に一貫して流れ、最後の牢獄の場面へとつながっていく。盗賊の頭フェイギンが最後に捕えられ、死刑執行の判決が下って監房に入れられたとき、彼は闇の恐怖に耐えかねて「灯だ、灯をくれ!」と声にならない声で叫ぶ。欲に生き悪に生き、おぞましい爬虫類のように暗闇と汚泥をすみかとしたフェイギンではあったが、最後に、自らの内面にどす黒く広がる闇に怯えるのである。

1) Charles Dickens, *Oliver Twist* (Oxford University Press, 1961), Ch. XXII, p. 159. (以後作品からの引用は章のみを示す)

Oliver Twist の世界は、このように闇が徹底的に支配力を振るっているわけであるが、時折この闇から離れたところで、ローズ・メイリーに代表される光の世界が全体をおおうかとも思える闇にくっきりと対立して現れる。そして、この対立し分化した二つの世界は、一向に解け合うことを知らず、無心なオリヴァを巻き込んで翻弄し続けるのである。

Dickens は *The Old Curiosity Shop* で、ネルという清純可憐な少女を醜悪な骨董店、さらにはクウィルプという怪物に対比させ、無垢たるものが本来帰属すべき世界から切り離されて、闇の中で自らの identity を失った様を描くことになるが、救貧院という救いようのない場所に生み落とされるオリヴァも、ネルと同じように社会の闇とくっきりと対峙させられている。J. H. Miller は “If there is any single image which we remember longest from *Oliver Twist* it is the picture of the lost boy, . . .”²⁾ と述べているが、オリヴァは闇と光の世界で進むべき道を知らないだけでなく、自らの identity を完全に喪失した ‘lost boy’ なのである。

オリヴァは、“the dreary prison” (Ch. LI) とも言える救貧院で行き倒れた母から “the world of sorrow and trouble” (Ch. I) に生み落とされる。彼は救貧院に象徴される非情な社会に、それこそ余計者として生まれてくるが、「生まれつきか遺伝か、しっかりとした立派な精神」(Ch. II) を胸に植え付けられていた彼は、始めから救貧院とか葬儀屋といった醜悪な世界では異端児である。周囲は寄ってたかって彼の生存権を奪おうとする。「父親も、母親の住所も名前も、身分も皆目わからない」(Ch. II) 彼の名前は、教区吏バンブルがアルファベット順に用意していた名前をそのままつけたもので、氏素姓とはまったく関係のない、ただ物を識別する符号に過ぎない。そして、毛布にくるまれていた時は、「貴族の子供といっても、乞食の子供といってもいい」オリヴァが、救貧院の支給する「黄色くなったキャラコの古着」を着せられてしまうと、その素姓は完全に掻き消され、教区の厄介者になり下

2) J. H. Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Indiana University Press, 1969), p. 54.

がってしまうのである。人間を固定化し、その主体性を奪うものとして、この小説で服は重要な働きをしている。服の威力について Dickens は次のように注釈している。

What an excellent example of the power of dress, young Oliver Twist was! . . . now that he was enveloped in the old calico robes which had grown yellow in the same service, he was badged and ticketed, and fell into his place at once—a parish child—the orphan of a workhouse— (Ch. I)

オリヴァは救貧院に始まって闇と光の世界を転々とすることになるが、その度に新たな服をまとうことになる。つまり、服がオリヴァの仮の status を決定するのである。人間が服に従属し、服によって人間が変えられる主客転倒の関係である。教区委員会の紳士は「白チョッキ」としてのみ言及され、人間というよりは人間の服を着た委員会と言える。教区吏のバンプルは、金モールのついた外套と三角帽を身につけてふんぞりかえっているが、それを奪われるとかすのような男になって、妻の尻に敷かれてしまう。フェイギンは沢山の服をため込んでいるが、それは単なる服 (dress) ではなく表面を飾る衣裳 (costume) であり、変装の手段として用いられ、ナイシーやノア・クレイポールは、この衣裳を着て芝居をし、人を欺き自らを欺くのである。そして術策を操って世を渡る Fagin も、最後には人間として存在していたのが嘘であるかのように “heaps of clothes” (Ch. LII) と化して、絞首台にぶら下がる日を迎える。

このように人間性を喪失した社会は、周囲に同化せず人間らしく生きようとするオリヴァに強い敵意を見せる。オリヴァはその得体の知れない力に抗して、三度抵抗の叫び声をあげる。最初は、ひもじさに耐えかねて救貧院の孤児たちが、お粥をもう少し増やしてもらいたいと頼む役をくじ引きで決めたとき、それがオリヴァに当たり大胆不敵に “Please, sir, I want some more.” (Ch. II) と要求する場面である。虫けらに過ぎないオリヴァの反抗

は、人間を固定した世界に縛りつけ、一個の人間の魂など認めようとしないう社会への不敵な挑戦であり、そうした社会の代表である白チョッキの紳士は、彼の無礼を耳にすると、「あいつは今に絞首台にのぼるぞ」(Ch. II) と予告する。オリヴァは禁錮を命じられ、悪い病気にかかった生き物のように真っ暗な部屋に隔離される。

... when the long, dismal night came on, (Oliver) spread his little hands before his eyes to shut out the darkness, and crouching in the corner, tried to sleep: ever and anon waking with a start and tremble, and drawing himself closer and closer to the wall, as if to feel even its cold hard surface were a protection in the gloom and loneliness which surrounded him. (Ch. III)

オリヴァを支配する闇はここで牢獄の形を取って彼を脅迫する。狭い壁の中に閉じ込められていても、闇はその壁をも呑み込んで恐怖は果てしないものとなる。壁と闇によって周囲の世界から完全に隔絶され、孤独の極みに置かれたオリヴァは、冷い壁がこの世に存在するただ一つの味方であるかのように、救いを求めてにじり寄るのである。

オリヴァはこのあと、教区の手から彼を引き取ってくれる者には5ポンドの報酬を出すということで、品物のように売りに出される。そして煙突掃除人のガムフィールドに連れて行かれそうになるが、その男に殺されると直感した彼は、治安判事に自分の気持ちを必死に訴える。そのため彼は、救貧院の子供には生きる権利などないともいうように、「恐ろしい恥知らずの小僧」とか「いつかはしばり首にあう」といった痛罵を浴びせられるのである。教区の委員たちは、オリヴァのような害虫は何としてでも葬り去らなければならないと躍起になっているが、この治安判事だけがオリヴァを一個の人間として認めようとする。しかし彼は、強力な社会機構の中ではまったく無能であり、オリヴァが救われるのは、この役人が極度の近視であるという偶然によるのである。バンプルに連れられて落ち着き先の葬儀屋に連れて行かれ

るとき、彼はバンプルに向かって思わず、“So lonely, sir! So very lonely! Everybody hates me. Oh! sir, don't, don't pray be cross to me!” (Ch. IV) と訴える。ここで彼は、自分が誰からも庇ってもらえない孤児の悲しさと、自分を抹殺しようとする社会の敵意を全身に感じている。葬儀屋の手に落ちたオリヴァは、もはや人間として生きることを許されないと知ったかのように、「犬さえも見向きもしないような食物を、飢えた狼さながらの勢いで食いあさる」(Ch. IV) 浅ましい獣になり下がってしまうのである。

しかしこの葬儀屋で、彼は第三の反抗をする。ノア・クレイポールに母の悪口を言われて、敢然と彼をぶちのめすのである。オリヴァの狂ったような母への執着には、母のことはほとんど分かっていない彼のことを考えると理解しかねるほど激しいものがある。後になってオリヴァは、現実には存在せず見たこともない母のことを、「ぼくが病気で苦しんでいるのを見たら、お母さんはきっと悲しい顔をなさるでしょう。夢の中で見るときは、いつも美しくて幸福そうな顔をしていらっしゃるけど」(Ch. XII) とベドウィン夫人に言う。彼は暗く寒々とした世界を漂流しながらも、ノアのように父母の愛を失って浮草となった人間と違い、この世で唯一のえにしである母の愛に思いを馳せることによって、自らの帰属すべき世界を希求するのである。さらに言えば、オリヴァの性格と徳性は、彼が経験するものとはまるで違っており、周囲の影響力をまったく受けないところから、彼は「別世界からやって来たように思われる」人物で、彼の「母」への希求には、³⁾ *The Pilgrim's Progress* のクリスチャンが「絶望の沼」を脱して「天の都」を目指して進むように、この世の外に救いを求める信仰とも言えるものが感じられるのである。

ここで Dickens 自身の孤独に苛まれた子供時代に触れておく必要がある。靴墨工場の窓際に置かれた机に、疲れのためか顔をうつぶせて眠っている Fred Barnard の描いた幼い Dickens の姿は、不思議とオリヴァとだぶっ

3) Steven Marcus, *Dickens: From Pickwick to Dombey* (Chatto & Windus, 1965), p. 80.

て見える。Dickens は孤児ではなかったが、いかにも孤独なその姿からうかがわれるように、彼も孤児同然の身の上であった。彼は友人の John Forster に遺した自叙伝の断片で、その頃の気持を、「こうした生活から救い出されることは絶望的だと私は考え、そのことはもうまったく諦めてしまった。ただ私は、一時間たりともその生活に甘んじなかったこと、そして⁴⁾じめなほどに不幸せであったことを厳として確信している」と語っている。孤独と絶望と屈辱の生活の中で、それに甘んじることなく、より良い世界への脱出を切に願う気持はオリヴァーの場合と同じである。ただオリヴァーと違って、不幸の因は母親であった。⁵⁾ Dickens は、*Nicholas Nickleby* では母親をモデルにしたと言われるニクルビー夫人をとことん愚かしく描きながらも自叙伝の *David Copperfield* ではクレアラという天使のような女性を自分の母親にしている。この二つの母親像は、おそらく不幸な子供時代の心で見た現実と夢が生み出したものであろう。Dickens 自身もオリヴァーと同じように現実には存在すべくもない天使のような「母」を求めてやまないのである。

オリヴァーは、母親の悪口を言われて三度目の反抗をしたあと再び監禁されるが、彼の心のうちには、「たとえ生きたまま焼かれようとも、苦痛の叫びひとつたてることはしないような誇りが湧き上がって」(Ch. VII), その誇りを閉じ込め、抹殺しようとする牢獄を自らの意志で抜け出し、70マイル離れた遠いロンドンへと旅を始める。しかし、牢獄の外に出たはずのオリヴァーは、外界の寒々とした光景に怯える。

It was a cold, dark night. The stars seemed, to the boy's eyes, farther from the earth than he had ever seen them before; there

4) John Forster, *The Life of Charles Dickens* (J. M. Dent & Sons, 1966), Vol. I, p. 26.

5) Dickens は12歳のとき、テムズ河沿いの Hungerford Stairs にある Warren の靴墨工場に働きに出される。このとき彼は両親に見捨てられたという気持ちを痛切に味わうことになるが、父親が工場の支配人といさかいを起こして家に引き取られたとき、母が躍起になって彼を送り返そうとしたことを、「私はその後けっして忘れなかったし、忘れることはしないだろうし、忘れることはできない」と述べている。Cf. John Forster, Vol. I, p. 32.

was no wind; and the sombre shadows thrown by the trees upon the ground, looked sepulchral and death-like, from being so still.
(Ch. VII)

彼の目に入る情景は、寒々とした死のように静まりかえっている。そして星までもが彼の目には遠ざかってしまったように見える。オリヴァは狭い葬儀屋の穴ぐらの牢獄から、果てしない宇宙まで広がる無限の空間に出るわけであるが、それは彼を「今まで味わったことのないほどの孤独」(Ch. VIII)に追いやるのである。彼は牢獄に幽閉される恐怖に加えて、外界から疎外されるという恐怖、つまり 'enclosure' と 'exclusion' という二つの恐怖にさらされることになるのである。

救貧院のある田舎町から広い世界に出たオリヴァは、この疎外感をいやというほど味わうことになる。自らの存在のありかを求めてロンドンという幻の世界に踏み出す彼の前にまず現れたのは、ジャック・ドウキンズ（アートフル・ドジャー）という得体の知れないチンピラだった。ドウキンズは、オリヴァを鳴と見て話しかけてきて色々と親切にしてくれるが、オリヴァには彼の言葉がちんぷんかんぷんで理解できない。そして「大人の上着を着て、それが踵のところまで垂れ、……ブルーチャ型の深靴をはき、4フィート6インチかそれよりもっと小さいくらいの背丈で威張りかえっている」(Ch. VIII) 彼の様子は、大人やら子供やら見当がつかない。このドウキンズに連れられて、オリヴァは初めてのロンドン見物に出かけるわけである。彼は、Islington, Angel 旅館, St. John's Road, Sadler's Wells Theatre, Exmouth Street, Coppice Row, Hockley-in-the-Hole, Little Saffron Hill, Saffron Hill the Great と足速にロンドンの名所を駆け巡るが、案内者は何一つ説明してくれないし、これらの立派な場所の由緒をオリヴァは知る由もない。ことさらに列記される地名は、ドウキンズにとっては自分の居場所を確認する手がかりになるわけだが、オリヴァにとってはそんな地名は何の意味もなく、かえって自らの寄る辺なさを募らせるだけなのである。彼は、どこに行き着くとも知れぬ通りをドウキンズのあとについて夢中で駆け抜けて行くが、通

りはますます汚なく、ますます狭く、ますます込み入ってくる。そしてやっと辿り着いた Saffron Hill の不潔さに、オリヴァは度肝を抜かれる。

A dirtier or more wretched place he had never seen. The street was very narrow and muddy, and the air was impregnated with filthy odours. . . . Covered ways and yards, which here and there diverged from the main street, disclosed little knots of houses, where drunken men and women were positively wallowing in filth; . . . (Ch. VIII)

オリヴァが小さな牢獄を逃げ出して、ようやくの思いでやってきた「大きな広い都」ロンドンでは、想像を絶する腐敗の都であった。家は朽ち、空気は異臭を放ち、人間はどぶねずみのように汚泥の中でのたくっている。あらゆるものが墮落の底に沈んだこの混濁の世界に紛れ込んだオリヴァは、さらに「ほの暗いろうそくの灯りが廊下のずっと奥でゆらめく」(Ch. VIII) フェイギンの隠れ家に連れ込まれる。彼らは地上での生活に耐えられないとでもいうように闇の奥に潜行し、地下の牢獄に自らを幽閉しているのである。田舎の小さな牢獄を脱け出したオリヴァは、「常に内へ内へと、そして下に下にと内奥に向かい、⁶⁾ けっして外の出口へ向かうことをしない」限りなく混沌とした迷路という牢獄に捕えられるのである。

しかし、すべての素姓が掻き消されたと思えるこうした腐敗と闇の中で、かすかに過去の名残をとどめているものもある。オリヴァが後に監禁される部屋は、何もかも黒ずんで汚れているが、立派な建物の形跡が残されている。

It was a very dirty place. The rooms up stairs had great high wooden chimney-pieces and large doors, with panelled walls and cornices to the ceilings; which, although they were black with neglect and dust, were ornamented in various ways. From all of these tokens Oliver concluded that long time ago, before the old

6) J. H. Miller, p. 59.

Jew was born, it had belonged to better people, and had perhaps been quite gay and handsome: dismal and dreary as it looked now. (Ch. XVIII)

「華やかで美しかった」ものが、「陰気で薄気味の悪い」ものに姿を変えている。「フェイギンも生まれていないずっと昔はもっと立派な人たちのもの」だったのではないかと思うオリヴァは、埃と汚れの背後に美しいものの存在——フェイギン一味につかまる前に垣間見た善良な人たちの世界——を見るのである。しかしそれは遠い非現実の世界のように闇に埋れて定かには捉えられない。

場所や建物の荒廃は、人間について言えば精神の死である。それは無生物よりも無残な姿を呈する。子供時代の体験からくる ‘fear of falling’ は、Dickens の妄念のようなものであるが、たとえば *Sketches by Boz* の ‘Hackney-Coach Stands’ の中の、同じ貸馬車で運ばれる一人の女が、時の経過とともに田舎の娘——⁷⁾けげなく着飾った女——のんだくれの売春婦と墮落していく一つのパターンが端的に示すように、人間の心に広がる迷路は精神の指標を失なわせ、現実の迷路と同じように人間をますます混沌とした闇に、墮落の深淵へとといざなうのである。サフラン台地にあるいかがわしい居酒屋 ‘the Cripples’ に集まる客たちは、酒場の名が暗示するように精神的な不具であり、あらゆる悪徳に冒されている。そして女たちは、「見ている間に消えてしまいそうな若い頃の名残の色香をようやく保っている者もいれば、女らしさがすっかり打ち壊され、ただ放恣と罪の生活のいとわしい単調さだけを呈している者もいる。」(Ch. XXVI) さらにドウキンズが裁かれる法廷では、罪と貧困に喘ぐ者たちが、部屋のあらゆる物よりも不快な汚れを見せており、被告席の頭上にある埃だらけの時計だけが、唯一「当然進むべき道を進んでいると思われる」(Ch. XLIII) のである。

こうして、オリヴァを取り巻く物や人間はすべて死の影を帯び、本来の姿

7) Charles Dickens, ‘Hackney-Coach Stands’ in *Sketches by Boz* (Oxford University Press, 1957), p. 84.

とは懸け離れた別物になっている。‘house’ は ‘den’ や ‘ken’ になり、人間も、例えば誤認逮捕されたオリヴァを裁く治安判事は ‘Fang’ という名にふさわしく人間よりも野獣を思わせる野蛮な男だし、サイクスは ‘dog’、フェイギンは ‘loathsome reptile’ といった具合である。さらに闇に生きる人物たちは、芝居をすることによって墮落した本性を隠蔽しようとする。彼らは、自分を欺くことによって人を欺き、虚構の人間関係の中で命脈を保っているのである。その中でもフェイギンは最高の役者で、この ‘the merry old gentleman’ の素晴らしい演技で、オリヴァは生まれて始めて涙が出るほど笑いころげる。彼らの正体は、るつぽ (melting pot) で溶かされる彼らの盗品のように、完全に消去されているのである。

こうした虚構の世界に入り込んだオリヴァは、わけの分からぬままに泥棒仲間の片棒を担ぐことになるが、ブラウンロウという紳士に偶然保護される。悪の世界から善の世界に移るとき、オリヴァは必ず身体の衰弱や怪我で昏睡状態に陥っている。悪の世界の名残である肉体の苦しみと、昏睡から目覚めたときの安らかさは二つの世界の懸隔を物語っている。Arnold Kettle の言葉を借りれば、「この二つの世界はまったく別個なものなので、オリヴァが一つの世界から他の世界に変身するとき、目覚めて新しい生活に入るとい⁸⁾形を取らざるを得ない」のである。オリヴァが目覚めて入った善の世界は、たしかに彼に生まれて始めて覚える安らぎを与えてくれる。しかし、彼は闇にいたときと同じようにつかみ所のない状態に置かれる。名前はいつの間にかトム・ホワイトになっていて、自分で自分が説明できない。そしてブラウンロウ氏の家の壁にかかっている、自分の素姓を解き明かすはずの女性の肖像画が無情にも取りはずされ、彼は悪の世界にいたときと同じように真実から遠ざけられるのである。ブラウンロウ氏に信用されたいオリヴァは、自分の身の証をたてるために使いに出るが、再びフェイギン一味につかまり、束の間の安らかさが夢であったかのように、さらに濃密な闇に没してしまうの

8) Aronold Kettle, *An Introduction to the English Novel* (Hutchinson University Library, 1961), Vol. I, p. 130.

である。

オリヴァはブラウンロウ氏の家で、母の面影を見、ベドウィン夫人の心にしみる優しさに接して、自分の帰属すべき世界をおぼろげながら感じるが、依然として彼の世界は闇に包まれている。いや闇は一層濃度を増す。そして彼は掏摸という第一の犯罪に続いて、押し込み強盗というさらに重い犯罪の荷担者になりかける。このとき、フェイギン一味の闇の世界はローズに代表される光の世界と初めて衝突することになるが、これ以後の場面は、その衝突の余波を漂よわせながら夢の様相を色濃く帯びてくる。盗賊たちはオリヴァを残したまま再び闇の世界に紛れ込み、善意の人たちの銃によって打たれ傷ついたオリヴァが、二つの世界の狭間に立たされる。彼は始めはメイリー家の人たちから怖がられ、珍しい生き物のような扱いをされるが、彼を介在にしてこれまで別個に存在していた二つの世界がつながりを見せ始める。そしてこの小説でもっとも印象的な場面が訪れる。

ある美しい夕辺、オリヴァは窓ぎわの机に向かって一心に勉強していたが、知らず知らずのうちに眠りに陥ってしまう。

Oliver knew, perfectly well, that he was in his own little room; that his books were lying on the table before him; that the sweet air was stirring among the creeping plants outside. And yet he was asleep. Suddenly, the scene changed; the air became close and confined; and he thought, with a glow of terror, that he was in the Jew's house again. There sat the hideous old man, in his accustomed corner, pointing at him, and whispering to another man, with his face averted, who sat beside him. (Ch. XXXIV)

オリヴァは完全に別荘の小部屋にいることを知っているし、事実いるわけだが、それにもかかわらず現実と夢との境にある彼は、ただフェイギンの黒い影を窓の外に見ただけでなく、完全にあのおぞましいユダヤ人の巣窟に舞い戻ってしまっているのである。二つの世界はオリヴァの心の中で分かちが

たく同居し、混ざりあっているのである。Dickens はこれを「夢と現実を二つに分けることがほとんど不可能」(Ch. XXXIV) な状態と注釈している。別荘の小部屋という現実の中に悪夢が具体的な形を取って現れて来るわけであるが、実はこの悪夢の方こそ現実であって、オリヴァが仮に置かれている天国のような世界こそ幻であると言えるだろう。オリヴァが目覚める形で善の世界に入るということは、悪夢から目覚めて美しい夢に移行することに他ならないのである。Graham Greene は、「子供たちは昼のうちは、夜寝に行くときの暗い廊下のことをすっかり忘れて⁹⁾いる」という表現で、オリヴァの夢を説明している。昼間すっかり忘れていた暗い廊下は、夜になると恐ろしい力で子供の心によみがえってくる。白昼の世界ではフェイギンやモンクス影は消えたように見えても、その恐怖は潜在しているのである。ここに大人の realism では律しきれない子供の世界の realism がある。これを非現実的な realism, あるいは ‘alphabetical realism’¹⁰⁾ と言うこともできよう。大人たちが八方手をつくして限なく二人の行方を捜しても、彼らが現れたという形跡すら見つからない。しかし、「二人の顔は深く石に彫り込まれ、生まれたときから目の前に置いてあるもののようになり、しっかりとオリヴァの記憶に刻み付けられた」(Ch. XXXIV) というわけで、オリヴァにとっては悪の実在は見紛うことのない現実なのである。しかしオリヴァの見たものは、まるで夢であったかのように現実には存在しない。押し込み強盗に入る前にサイクスに連れ込まれた家をあとなになって訪れたとき、そこには見たこともないせむしの男がおり、「部屋を見回したが、オリヴァが話したような家具もなく……食器棚の位置も違って」(Ch. XXXII) いるのである。それは、オリヴァが逃れて来た夜の世界が、白日のもとで姿を隠しているに過ぎないのである。オリヴァの置かれる二つの世界は、John Bayley が指摘するように「別個に存在する二つの現実世界ではなく、意識に共存するファンタジ

9) Graham Greene, 'The Young Dickens' in *Collected Essays* (The Bodley Head, 1969), p. 109.

10) G. K. Chesterton, *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens* (Kennikat Press, Inc., 1966), p. 42.

一という一つのコインの¹¹⁾両面」なのである。

それでは何故オリヴァだけが悪を感知する力を持っているのであろうか。それは、彼が悪の世界に一時的に存在したという理由だけではない。ここでオリヴァの素姓が問題になってくる。

オリヴァの素姓は、ブラウンロウやナンシーの働きでやがて明らかにされることになるが、彼にはモンクスという腹違いの兄があり、オリヴァの方が重婚によって生まれた私生児（罪の子）だったのである。父の遺言で、弟のオリヴァが堕落した人間になれば、遺産はモンクスのものになるというので、彼はフェイギンを使って何とかオリヴァを悪の道に誘い込もうと画策していたのである。さらにローズ・メイリーの素姓も明らかにされ、オリヴァの母親の妹であることが判明する。オリヴァは、モンクスという悪魔とローズという天使を血縁者に持っていたのである。オリヴァが二度にわたって遍歴した善と悪の世界は、自らの内面の投影であったと言えるのである。たとえば George Cruikshank の描くオリヴァが、フィイギンに似ているという説がある。¹²⁾それはともかく、光と闇がオリヴァの内面に共存していることは確かである。「今にしばらく首に会う」と言われ続けるオリヴァは、実際にしばらく首に会うフェイギンに最後に会って祈りを捧げる。この二人は反対の極に存在しながらも、お互に強く牽引する関係にある。彼らは正反対の世界に住んでいる別個の存在ではなく、前述の Bayley の言葉を借りれば同じコインの表裏であり、フェイギンはオリヴァの身代りとなって絞首台にのぼることになるのである。

結果的にオリヴァは、「父を得て父を、姉を得て姉を、母を得て母を失い、喜びと悲しみとが一つの盃にまじっていたが、苦い涙はなかった」(Ch. LI) というわけで、「母」を求める彼の旅はハッピー・エンドに終る。しかしその一方で、オリヴァの行く末を心から祈ってくれたディックは死に、この寓話的な小説の中でただ一人現実味のある存在を示したナンシーはオリヴァ救

11) John Bayley, 'Oliver Twist', *Dickens and the Twentieth Century*, eds. J. Gross and G. Pearson (Routledge and Kegan Paul, 1966), p. 51.

12) Cf. Bayley, p. 52.

出の犠牲となって虐殺される。そしてローズ・メイリーとナンシーの出会いに象徴されるように、*Oliver Twist* の登場人物たちは対立した世界に相変わらず閉じこもったままである。たとえば最後にオリヴァが連れて行かれることになる田舎も、ハリィの言葉で次のように表現されている。

”I (Harry) offer you (Rose), now, no distinction among a bustling crowd; no mingling with a world of malice and detraction, . . . but a home—a heart and home—yes, dearest Rose, and those, and those alone, are all I have to offer. . . . there are smiling fields and waving trees in England’s richest county; . . . ” (Ch. LI)

「ぼくは今、騒々しい人混の中での出世とか、悪意や誹謗の世界にまじっての生活をあなたに捧げるのではなく」という言葉からもうかがえるように「野原と手を振って迎えてくれる」ハリィとローズの田舎家は、この世から seclude された別な意味での牢獄に他ならない。

形の上から言えば、オリヴァは fortune と identity という二重の意味の inheritance を回復することはできた。しかし、オリヴァが罪の子でモンクスという薄汚れた異母兄弟がいるという事実は、inheritance の回復が人間を必ずしも幸せに導くものではないことを暗示している。22年後に書かれた *Great Expectations* のピップは、自らの受け継いだ ‘expectations’ が脱獄囚のマグウィッチからのものであることを知って愕然とする。‘great expectations’ を持んで、‘great disappointments’ を味わうことになるのである。そして同じ孤児でもピップは、オリヴァや *David Copperfield* のデイヴィッドと違って、遺産を得ることによって純粋さを失っていく。さらに、1865年に出版された *Our Mutual Friend* では、糞の山の相続に人々が血道をあげる様が描かれ、inheritance それ自体が擲擲されるようになる。Dickens の作品の中で、愛とか真心といった人生の灯は急速にその明るさを減じていき、やがて真実の光を完全に閉じ込めんとする *Little Dorrit* の恐るべき牢獄の出現を見るのである。